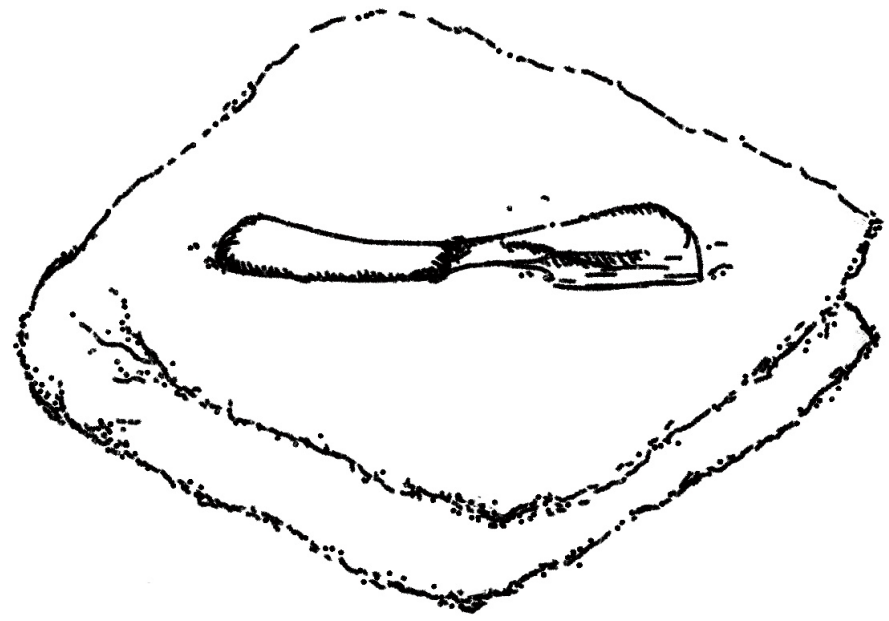


横光刺一

懐入る
罽
襪



登場人物

夫（彼）

妻

未知の婦人（婦人）

◆彼と妻の家。夫婦は結婚から六年間、同じ家に住んでいる。
◆ナレーター、妻

彼と妻とはもう長らく結婚した当時の汚い家に住んでいた。
周囲の立て籠んだ薄い板壁の家々も彼の家と同様に寒そうに
傾いていた。

彼は貧しい画家であった。彼らは結婚してから六年の間
何の変化も起らなかった。また彼は何の変化も望まなかった。
ただ彼はこうして立てば必ず家々の冷たい瓦ばかりを
見ていなければならぬその家が嫌いであった。どこか汚くともよい
陽のよく当る自由に広々と空を見ることの出来る家が欲しかった。

彼の妻は此の頃よく良人の姿をしげしげと見ることが多くなって
来た。見る度に良人の姿は何ぞだかいつも淋しそうに萎れて見えた。
前には彼女の良人はそうでもなかった。貧しさは今とて
さして前とは変わっていないかった。が、貧しい中でもその頃良人は
どこかに若々しい元気があった。

妻 「それに今は？」

そう思うと妻は急に夕暮れに迫られたような不安な淋しさを
感じて来た。

◆初秋。薔薇を写生する彼のひげが伸びていることに気づく妻。
◆ナレーター、彼、妻

或る日、妻は卓子の上の薔薇を写生している。良人の横顔を眺めてみた。と、彼女は、

妻 「あら。」

と声を立てかけた。

別に驚くこともない。ただ良人の顎の先端に生えていた髭が、少し眼立って延びていたのに過ぎなかった。だが、彼女はそれが非常に淋しく見えた。

妻 「まア、もうあんなに濃くなって！」

彼女はどうかして良人をいま一度昔の若々しい良人の姿にしてみたくなって来た。そこで、

妻 「ね、あなた。」

と彼女は良人に呼びかけた。

良人は薔薇の花を見詰めたまま黙っていた。薔薇は埃りの積った壺の中で、一輪、きりりと真赤に咲いていた。

妻 「ね、」

と彼女はもう一度云いかけた。が、こう云う仕事の最中に無理に話しかけては直ぐ不機嫌になる良人の性質を思い出した。で、良人の手のすいた時を待つ代りに彼女は剃刀と石鹸とを出して来ておいた。

妻 「あらあら、もうタオルが皆汚なくなってる。」

と彼女は何心なく呟いた。

すると、良人は、

彼 「何に？」

と云って急に妻の方を振り向いた。

妻 「いえ、タオルがね、もう皆汚なくなつて了いましたの。」

彼 「タオルか、買って来ようね。」

と良人は優しく云った。

妻には 良人が何ぜそんなにも不意に大きな声を出して訊いたのか
分らなかつた。

妻 「どうなすつたの？」

彼 「何んだ？」

妻 「今お手がすきましたの？」

彼 「手なら、いつでもすいている。」

そう良人は云うと 画筆を捨てて部屋の中を歩き出した。

良人にとつて、手のすいていると云うことは、とにかく

侮辱であること位い 彼女とても知っていた。

妻 「お顔をお剃りにならない？」

彼 「顔か。」

妻 「髭がそれは延びていましてよ。」

彼 「剃ってもいいが、今更剃っても始らないね。」

妻 「でも、お剃りになるといいわ。」

彼 「何んだか、計画でもありそうだね。」

と良人は笑いながら云って妻の顔を見た。

妻 「どうして？」

と妻は訊き返した。が、彼女の顔は急に赤味を帯んで来た。

彼 「どうも、少し拗こすぎる。」

妻 「あら、あんなことを仰言るわ。そう云えば、あなただって少し変よ。」

と妻は云った。

彼 「俺が？」

妻 「ええ。」

彼 「何が変だ？」

妻 「今日はいつもよりお優しいわ。」

彼 「そうかね。」

妻 「ええ、いつもそんなだと、随分いいと思いますわ。」

彼 「所が、いつもと同じなんだがね。」

妻 「ちがいますわ。今日はきつとどうかしてらっしゃってよ。」

彼 「そうかね。」

妻 「そうかねって、そんなにお優しくなる理由がおありになるの？」

彼 「あるね。」

と良人は云うと、ただ澄して妻を見た。

妻は一寸心を突かれたように身が緊った。何か良人には自分とは関係もない喜ばしいことがありそうに思われた。

妻 「どんなこと？」

と彼女は眼を見張って訊いた。

彼 「そうだね。何だか分からないが、ありそうな気がするんだ。」

妻 「それじゃつまらないわ。」

彼 「つまり、だから有るわけだね。」

妻 「誤魔化しちゃ、いや。」

と妻は云った。

彼 「いや、そんな気がするから、そんな気も有ると言うだけなんだ。別に誤魔化そうと思ったって 誤魔化すほどの問題じゃないじゃないか。」

妻 「でも、はっきり云って下さいな。私、何んだか心配になって来たの。」

彼 「はっきり云えないんだよ。云えるほどはっきりした理由は、まあないと云ってもいいね。だから、まあないとも云えるね。」

妻は気がいらいらして来ると、

妻 「じゃ、ある方が本当なの、ない方が本当なの？」

と訊いてみた。

彼 「どちらも本当だよ。」

何か良人は隠している と妻は思った。

妻 「そんなことは、あり得ないじゃありませんか。」

彼 「なかなか、むずかしい言葉を使うね。」

と良人は云って笑い出した。

妻は娘のように一寸手で顔を隠す真似をして、

妻 「早く顔をお剃りなさいよ。」

とせき立てた。

彼 「顔も顔だが、とにかくこんな生活ではね。」

良人は剃刀の方を見ようともしなかった。が、妻には良人の優しかった理由が初めて飲み込めたように思われた。良人はいつもの我ままから黙ってはいたものの、此の打ち続いた貧しい生活の中へ自分を置いていなければならぬと云う積み重なった同情の重みから、ふと自然に愛情が首を擡げたにちがいないと妻は思った。

妻 「こんな生活が、もう面白くないと仰言るの？」

彼 「面白い筈がない。」

と良人はきっぱりと云った。

妻 「私、それがいやなの。」

彼 「いやだから、なおいやなんだ。」

妻 「いやいや、そんないやな考え方をなきると私、いやよ。」

妻は悲しそうに顔を曇らせた。

彼 「だって、いやだ。」

妻 「私ね、私、あなたに生活がいやだなんて云われると、

つらアくなるの。貧乏していったっていいわ。私、今程の

貧乏なら、どんなに有難いかわらないわ。食べていけるんです

もの。それに私、あなたに今以上に出世をしていただきたい

なんて、ちっとも思っちゃしないんですもの。」

彼 「本気でそんなことを云ってるんか？」

と良人は訊いた。

妻 「ええ、何ぜ？」

彼 「俺はお前にそんなことを本気で思わせているのだと思うと、

なおいやだ。」

妻 「どうして？」

と妻は訊いた。

妻には自分の怒りたいのを代って怒り出したかのようなその

暴い良人の言葉の出方が分らなかつた。

彼 「俺はもうお前から、出世をしない男だと見限られている

男なんだ。」

妻 「また、そう云ういやな考えようをなさるのね。」

彼 「俺はもうひねくれているんだね、とにかく、こう云うときになると、定って不愉快な方へ考えて行く。どうも困ったものだ。」

と良人はまた静に云った。

妻 「だから私、云ってるのよ。私、ちっともあなたをそんな馬鹿な方だとは思ってやしないのよ。あなたは不遇な人なんだわ。だから私、私のようなものがお傍にいるので、それでおあなたに済まない気がしていますのよ。」

彼 「うまい。」

と良人は一口云うと畳の上へ寝転んだ。

妻 「何が？」

彼 「お前は俺が貧乏をさせたものだから、俺を慰めるのに大分うまくなった。」

妻 「また！」

妻はもうあきれたと云う顔をした。

彼 「そうじゃないか。うまいよ、うまいよ。だから、俺はうまく慰められて、いい気になって了うんだ。なかなか、お前はうまい。」

妻 「いやな方ね、あなたは。」

彼 「実際だ。」

妻 「何を云っても駄目ね。あなたは。」

彼 「何が駄目なもんか。俺はいい気になって、なお貧乏を続けて行ってるじゃないか。俺は此の貧乏が至って楽なんだ。」

こんな楽なことを続けさせてくれるのも、つまりお前だよ。」

妻 「皮肉をいってらっしゃるのね。」

彼 「馬鹿な。」

妻は何か云おうとしたが黙って了った。良人がそう云う風に貧乏にこだわって理屈を言い出すときりのないのを知っていた。それがなお彼女には淋しかった。事実、彼女には良人の性格として自分がいなければ良人はそう貧乏を苦にする性質とも思えなかった。ただ自分のいるためばかりに良人は貧乏を気にし始めたのだと思うと、それがまたなお彼女の心を落ちつかせなくなってきた。彼女は良人の想像しているそれほど、自分が自分達二人の生活の貧しさを気にしているのではないと云うことを、どうかして良人に知らせたかった。ただ今少し生活が富裕であれば良人の気苦労をなくせるにちがいないと思う配慮からばかりのために、自分達は自分の生活の豊かになることを望んでいると云うことも知らせたかった。だが、そうかと云って、その生活を豊かにせんがために良人をあくせくと無理にも働かせる気は起らなかった。

妻 「ね、石鹸と剃刀とを縁側へ出して置きましたのよ。」

と妻は云った。

良人は黙っていた。

妻 「おいやなら、此の次になさるといいわ。」

彼 「うるさいね。」

と良人は一口言った。

妻 「だから、おいやだったら、もうよして此の次にして下さいな。」

彼 「髭がうるさいと云うんだ。すると、つまり、剃るのもうるさい

と云うことになるかな。すると、貧乏髭と云う奴になるんだね。
すると、こいつは一寸よく似合うなア。」

妻 「何を云ってらっしゃるの？」

彼 「いや、貧乏髭の話さ。」

妻にはもう良人の事々に貧乏と云いたがるそのひねくれが
不愉快になって来た。

妻 「あなたは どうして貧乏貧乏って仰言るの？」

と妻は良人を睥んで云った。

彼 「そうだね。一度云えば、それだけ貧乏が逃げて行くように
思うんだ。」

妻 「あなたの仰言るお気持ちは、よく私に分かってよ。」

彼 「どう云うんだ？」

と良人は寝ながら妻の顔を仰いで訊いた。

妻 「私に云う当てつけよ。」

彼 「そりや、そうさ。」

妻 「まア。」

と妻は云ったまま口を閉めなかった。

彼 「そりや、そうだよ。」

妻 「じゃ私、お暇を頂くわ。」

彼 「そりや勝手だ。」

妻 「いやなんですもの。私が貧乏をそんなにいやがっていると
思ってたらしやっては、私、もう立つ瀬がないわ。」

良人はただ黙って笑っていた。

妻 「もっと私が貧乏をいやがると、あなたにいいのね。」

彼 「うむ、その方が非常にいいな。」

妻 「じゃ私、これからいやがってよ。」

妻 「暇を頂くのはどうした？」

妻 「もうお暇を頂くのはやめたの。その代り、私、うんと貧乏をいやがるの。よくって。」

妻 「うむ。」

妻 「有り難い話ね。もう私、貧乏はいやいや。虐められてばかりいるんですもの。」

妻 「すまないね。」

妻 「すまないわ。いやよ貧乏は。貧乏なんかするもんじゃないわ。」

辛抱するといやがられるし、辛抱しないとお気の毒だし。」

そう云いながら妻は何か愉快そうに流し元の方へ立っていった。

◆秋。夫婦が新しい家に引っ越す。
◆ナレーター

秋が深くなって来た。彼は長らく望んでいた郊外へ変って来た。家の前には通りから玄関まで花に包まれた小路があった。庭には薔薇や糸菊が芒の中に混って咲いていた。苺畑はダリヤの花畑と並んで明るく隣りの空地の方へ拡っていた。花畑の中には小さな一つの井戸があった。朝な朝な彼の庭には井戸を中心にして霧が立った。夕暮れからは霧が野の方から流れて来た。

そこで彼は一つの謙遜な制作にとりかかった。それも矢張り薔薇であった。一輪の薔薇が風もない静な庭の中で身を慄わせた。見ると一枚の花弁が草の葉の上に落ちていた。彼はその後静な淋しさを画きたかった。一枚の花弁を失った姿の花が俯向いて咲いている。ただそれだけの単純な心境が彼を牽きつけたのだ。彼にはその薔薇の何の意味もない黙然とした感興が、色彩の華やかなそれだけに淋しくて面白かった。彼はその薔薇が出来上れば慄える薔薇として或る小さな展覧会へ出すつもりであった。彼の立っている後ろの方では、妻がエプロンをかけたまま花畑の中で井戸の水を汲んでいた。他家の白い数羽の鶏は彼女の周囲で遊んでいた。隣家の庭では掃き溜められた朽葉に火が点けられた。煙は竹藪に籠って静に彼の庭の方へ流れて来た。草の実をつけた犬が垣根の中を擦り抜けて彼の傍へ馳けて来た。犬の疾走に跳ねられた白菊は暫く垣根の裾でひとり静に揺れていた。

◆彼の絵に感動した婦人から、手紙が届く。
◆ナレーター、未知の婦人

彼の家の庭では 無花果の木が真先に葉を落した。それから
葡萄の棚が明るくなった。ダリヤは 秋雨に腐って来た。山茶花は
藪影の下で花を散らしては またいつのまにか咲いていた。小鳥は
日毎に変わって葡萄棚に来てとまった。そうして、秋は ますます
深くなる、庭の土に映る草の影が 一層美しくなってきた。
彼の散歩は いつも自分の家の庭の中を 一度丹念に廻ってみて、
それから芒の群がった 広々とした野の方へ歩いて行くことであった。
そう云う或る日、彼のその静かな生活の中へ 一通の手紙が来た。
それは 彼宛になった未知の婦人から来た手紙であった。中には
ただ簡単に彼の「慄える薔薇」から受けた感動が書いてあった。
しかし、彼には そう云う社会的な反響があったと云うことは、
それは いかに弱々しい声であるとは云え初めてのことであった。
間もなく、彼はある幽かな興奮を感じている自分に気がついた。
すると彼は そう云う自分が不愉快になって来た。彼は 妻には黙って
その手紙を 懐へ隠すと、興奮を压えるために 白い小花で埋まった
小路の中を往ったり来たりし始めた。彼は 歩きながら自分の興奮の
性質を考えた。それは その手紙が婦人から来たものであるからか、
それとも手紙が社会的な反響であったと意識するためか、
そのどちらに自分の興奮が 扇動されているかを彼は 考えた。彼は
一度その手紙に眼を通したに過ぎなかった。だが、その文字の
一字一句の抑揚までが 思い浮べる度毎に直ぐさま彼の頭の中に

明瞭に呼び上げられるほどだった。

婦人「あなたの御高名は兼ね兼ねから受け給わっております。だが、

私はまだ一度もお眼にかかったことはございません。それにこんな手紙を差し上げることをお赦し下さいませ。先日K会へ御出品なさいました「慄える薔薇」からは近來にない感動を受けました。益々御精進のほどをお願い申し上げます。やがては我が国の画壇に一つの大きな星が光り出すことと今から喜んでお待ち申しております。」

彼は此の文面を幾度となく思い出していたときであつた。ふと彼は群がった芒の中から一本の小さな茶の花を見付け出した。すると、彼は何ぜともなく自分の妻を思い出した。自分のために長らく貧しく咲き続けようとしている憐れな妻の姿が。それは清らかな哀感を持って慎ましく彼の心に匂って来た。彼はその手紙に現れた婦人を妻のために自分の心から追い払おうと努めてみた。彼は全力をもって自分の妻を他の何者より高く捧げてみたかつた。すると、不意に彼はその手紙を妻が書いているところを想像した。それはいかにもあの妻としては相応しい感じであつた。自分を励ますために偽手紙を書いた妻、そう云う行為をしななければならぬ妻を思うと、彼はまた急にその手紙を妻が出したのではないかと思ひ出した。すると、彼はその手紙を妻に見せてやろうと云う気になった。譬えそれは妻が書いたものではなくても妻が書いたのだとこちらが思ひ込んでいるように見せかけて、その手紙を妻に見せてやると云うことは彼には面白くなつて来た。そうすることが白々しい下品な芝居のように思われそうであるにも

拘からかず、それが今いまの静しずかな生活せいかつの中なかにある彼かれにはそうは思おもえなかつた。
何なんとなく愉快ゆかいな爽さわやかな物珍ものめずらしい遊ゆう戯ぎを見付みけ出だしたかのように
活潑かつぱつな感かんじが浮うかんで来きた。

◆彼が、婦人からの手紙を妻に見せる。
◆ナレーター、彼、妻

彼は 家の中へ這入ると庭の枯葉を掃き寄せている妻を呼んだ。

彼 「これを見るがいい。」

妻は 竹箒を脇にかかえたまま 良人に渡された手紙を読んだ。

読み終ると縁側に立っている良人の顔を喜ばしそうに見上げて、

妻 「まア、ほんとに、」

と彼女は云った。が、良人は冷淡に黙って彼女の顔を眺めていた。

妻 「矢張り あの絵は誰でもいいと思いますのね。私も近頃

お書きになったものの中で、一番いいと思いましたわ。」

彼 「それでどうだと云うんだね。」

良人は 一層冷やかな顔をした。

彼女には 良人が何ぞそんなに不服らしい顔をしているのか

分らなかつた。多分知らない婦人から来た手紙に自分が嫉妬を

感じているとも思っているのだと解釈した。

妻 「私、お喜びを申し上げているのよ。」

彼 「嘘をつけ。」

と良人は少し強い口調で云った。

妻 「あら、何ぞそんなことを仰言るの?。」

彼女は 良人のとげとげしい言葉が どう云う意味か判断が

出来なくなった。

妻 「あなたは 私が女の方から手紙が来たので、怒っていると

思ってたらしやるのね。」

彼 「馬鹿な奴だ。」

妻 「あら、だって、もしそんなことをお思いになって、怒って
らっしゃるんだったら、そりや誤解よ。私、つまらないわ。」

彼 「まだそんな生意気なことを云っている。」

良人の不機嫌さはいよいよ激しくなりそうだった。

妻 「おかしい方ね。どうしてそんなにお怒りになるの。私、
ちっともそんないやなことを考えているんじゃないわ。」

彼 「お前は、嘘つきだ。」

妻 「嘘なんか、私、嘘なんか、おかしい方ね。」

と妻は云ったまま良人の顔を悲しげに眺めだした。

彼 「此の手紙はお前が書いたんだ。」

妻 「あら！」

彼 「隠したって分ってるんだ。」

妻 「まアー。」

妻は意外の事に少し驚いた。が、そう良人から云われて見ると、
自分もそう云う風に 名前を隠してソツと良人に手紙を書けば
良かったと気がついた。

彼 「お前のしそうなことだ。こんないたずらをして、俺が喜ぶと
お前は思ってるんだろう。」

妻 「だけど、そりや私じゃないことよ。」

と妻は初めて落ちついて云った。

彼女は 良人からその手紙の差出人が自分だと思われていたのだと
思うと嬉しかった。

妻 「字を見たって分るじゃありませんか。」

そう彼女は云おうと思った。が、ふと彼女は その手紙の差出人が
自分であると良人にいつまでも思い続けさせたい希望を感じ出した。
と云うよりも 譬え自分かもし本当にそうした手紙を書いて今のよう
良人から怒られたとしても、どんなにそのときは 喜ばしいか
わからないと思った。いや、それより彼女は 良人からそれほど貞淑な
妻だと思われていたのにも 拘らず、どうして自分が 今迄そう云う
匿名の手紙を良人に書く美しい方法を忘れていたのかと、それが
羞しくさえ思われた。

妻 「でも、あなたは御出世をなすったんだわ。」

と、彼女は 何心なく喜ばしそうに云った。

すると、良人は 急に顔を顰めて 自分の部屋へ這入っていった。

◆部屋で一人思い詰める彼。庭の枯葉に火を点ける。
◆ナレーター、彼、妻

彼はひとり自分の部屋へ坐っ^{すわ}ていても妻の云^いった言葉^{ことば}がいつまでも追^おっ駈^かけて来^きた。

妻 「でも、あなたは御出^{ごしゅっせ}世^せをなすったんだわ。」

それは妻^{つま}が侮辱^{ぶじやく}のつもりで云^いったのではないと云^いうことは分^{わか}っていた。だが、彼^{かれ}はその言葉^{ことば}を訊^きかされると同^{どう}時に、何^なぜか世^よの中から急^{きゆう}に侮辱^{ぶじやく}されたような恥^{はづか}しきを感じ^{かん}じた。自分^{じぶん}にはそう云^いう侮辱^{ぶじやく}の方法^{ほうほう}がまだ一^{ひと}つ残^{のこ}されていたのだ。その最後^{さいご}の一^{ひと}つの侮辱^{ぶじやく}ももう与^{あた}えられて了^{しま}った。そう思^{おも}うと彼^{かれ}はもう人^{ひと}々の前^{まえ}へ自分^{じぶん}の画^えを晒^{さら}すと云^いうことが不^ふ快^{かい}になって来^きた。彼^{かれ}は今^{いま}はその手紙^{てがみ}からもう何^{なん}の興奮^{こうふん}も喜^{よろこ}びも感^{かん}じなかつた。譬^{たと}えその手紙^{てがみ}が他^{ほか}の婦人^{ふじん}から来^きたと明瞭^{めいりょう}に分^{わか}った今^{いま}でも、彼^{かれ}はそれが自分^{じぶん}の妻^{つま}から来^きた慰^{なぐさ}めの手紙^{てがみ}であつたならむしろ明^{あか}るい気持^{きもち}になれたにちがいないと思^{おも}つた。それより彼^{かれ}は、そう云^いう手紙^{てがみ}のために受^うけた自分^{じぶん}の興奮^{こうふん}を思^{おも}い出^だすと一^{いっ}層^{そう}不^ふ愉^ゆ快^{かい}な気持^{きもち}になつた。何^{なん}となく自分^{じぶん}の人間^{にんげん}としての価値^{かち}を判^{はん}然^{ぜん}と決^{けつ}定^{てい}せられたかのように、然^{しか}も今^{いま}迄^{まで}よりも一段^{いちだん}と低^{ひく}く自分^{じぶん}の人間^{にんげん}としての価値^{かち}を見^み極^まめたよ^うな気^きさえした。自分^{じぶん}の画^かいたあ^の「慄^{ふる}える薔^{ばら}薇^ら」は少^{すく}くともそうではなかつた。あ^の「薔^{ばら}薇^ら」は慄^{ふる}えた後^{あと}にもな何^{なん}の意味^いもな^く黙^{もく}然^{ねん}と咲^さいていた華^{はな}やかな色^{いろ}の淋^{さび}しさにその価値^{かち}があつたのではないかと彼^{かれ}は思^{おも}つた。彼^{かれ}はその「薔^{ばら}薇^ら」までが今^{いま}はもう無^む価値^{かち}なものに見^みえて来^きた。あ^の沈^{ちん}殿^{でん}した静^{せい}物^{ぶつ}の気^き品^{ひん}をひそかに見^み極^まめたと誇^{ほこ}つていた自分^{じぶん}の

心眼さえ最早や彼は疑い出した。

彼は手紙を引裂くと庭へ降りた。彼はただもう前日までの静かな気持ちを取り戻したかった。庭には妻の掃き寄せた枯葉が高く積もっていた。薔薇はまた新しい花をつけて草の中で咲いていた。白菊はもう朝毎の霜のために淡黄色く枯れかかって地の上に倒れていた。彼はその傍で半ば土に埋もれた円い一つの石を見付け出した。彼には今は何者よりその静かに動かぬ石が心を牽いた。彼はその石を見詰めていると、街上で無数に跳ね廻っている人々が新鮮に跳ねれば跳ねる程だんだん分裂しながら無生物に近づいているように思われ出した。そうしてそれとは全く反対に此の動かぬ石は、そのように静かであればあるほど一途に深く澄み渡ってひとり新鮮に延びるべきものへ向って延びているような感じさえし始めた。彼はその石を明日から画きたかった。

彼は今の頼りない自分の淋しさを慰めるために枯葉へ火をつけてみようとした。しかし、彼はマッチを持っていなかった。彼は後ろを振り向いて妻にマッチを命じようとすると、妻は縁側に立ったまま良人の心理が今どこをさ迷っているかを見抜こうとしているかのようにじっと彼の後姿を見詰めていた。彼はその妻の眼が心配そうに光っているのを見ると、

彼 「マッチ。」

と柔らかな声で云った。

妻 「はい。」

忽ち妻の姿は茶の間の方へ消えていった。が、また忽ち彼女の姿は現れた。

妻 「お前ね、もう少し枯葉を掃き寄せて来てくれないか。」

彼は 妻からマッチを受けとって 積った枯葉に火を点けた。煙は枯葉の端から立ち昇って霜枯れた花畑の上を緩やかに流れていった。間もなく煙の中から妻の掃き寄せて来る枯葉の群れが、転がりながら彼の傍へだんだんと近づいて来た。

彼は 煙にとり包まれた妻のその柔順な姿を見ていると何ぞかまた一層淋しさを感じ出した。

彼 「おい。」

と彼は妻を呼んだ。

妻 「はい。」

と妻は腰を延ばして彼の方を見た。

彼は 何か一言妻に優しい言葉をかけたかった。が、彼は何も云うことが出来なかつた。そのまま妻の傍へ行つて彼女の手を持つと黙つて庭の隅の方へ歩き出した。そこには穂を白ませた一叢の芒が繁つていた。

妻 「どうなさるの？」

と妻は手をひかれながら彼に訊いた。

彼は返事をせずに 芒の中へ腰を降ろした。枯葉が時々藪の方から落ちて来た。妻は彼の前に立つと少し羞しそうにして焚火の方へ眼を外向けた。

彼 「坐らないか。」

と彼は云った。

妻は 云われるままに彼の傍へ小さく蹲むと彼の膝の上へ手を乗せた。

彼 「もう春の花の種を撒いとかなくちゃならないね。」

妻 「そうですね。」

と妻は云った。

彼 「ひとつ罌粟を撒こうか。」

妻 「罌粟も宜いけど、私、フリジヤが好き。」

彼 「スイートピーはどうだ。」

妻 「良うございますわ。」

彼 「菜の花は？」

妻 「そしたら菜畑になって了わなくって？」

彼 「じゃチュリップか。」

妻 「良うございますわね。」 :

彼 「チュリップとスイトピーと、フリジヤと、それから、」

二人の花の話は芒の中でだんだんと賑やかになっていった。

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作など有名作家のあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください

劇団ののと読む名作文学 横光利一 『慄える薔薇』 Podcast 版

発行日 令和2年11月1日

著者 横光利一

編集 劇団のの

発行 劇団のの

<https://gekidannono.com/>
radio@gekidannono.com

※本文は、底本を劇団ののが入力・編集したものです。

現代仮名遣いに直しました。

底本 『春は馬車に乗って』近代文学館

初版 昭和44(1969)年

